TOKYO FORWARD 2025 文化プログラム

ろう者と聴者が遭遇する舞台作品

黙るな 動け 呼吸しろ

| 2025.11.29［土］15:00

| 東京文化会館 大ホール

メインビジュアル・タイトル：日比野 克彦

はじめに

『黙るな 動け 呼吸しろ』は、ろう者と聴者が出会い、共に創作する舞台として、
2023年から準備を重ねてきた作品です。

言葉も文化も違うろう者と聴者では、創作や稽古の進め方も大きく違います。
たとえば聴者はあらかじめ用意した台本を見ながら台詞や動きを覚えていきますが、
手話を通じて創作を進めるろう者が、文字の台本を用意することはあまりありません。
どちらかのやり方にかたよることなく、対等にひとつの作品に取り組むため、
ろう者のチームと聴者のチームは、まず、それぞれに、
自分たちの表現について深く考える時間をしっかりとりました。
そのあとで、ろう者の暮らす《霧のまち》と聴者の住む《百層》という、
異なる文化が出会い、交流する物語世界を一緒に組み立てていったのです。

手話を使う《霧のまち》と声で会話する《百層》の人たちは、なかなかわかりあうことができません。
劇中でろう者が見せる「オンガク」と、聴者が親しむ「音楽」も同じものではないようです。
この作品では、観客の皆さんにもそんな、わからなさや違いを体験していただきます。
（ですから舞台上の日本手話と日本語の通訳や字幕はありません）

まずは、目を開き、耳をすまして、この物語の世界を、
そこに息づく人々の呼吸を感じてください。
それが、違う世界を持った人たちが共に生きる社会を思い描く、
大切な一歩になりますように。

撮影：冨田了平

ストーリー

1

《霧のまち》は、浮遊し、移動するまち。
長い年月のなかで周期的に「もうひとつのまち」に近づくが、
厚い霧に阻まれ、お互いを知ることはない。

また、このまちには「音」という考えはなく、それを指す言葉もない。
人々は手や身体、顔の動きを使って会話している。
建国200年の記念の式典の日。
「もうひとつのまち」から一人の男（チャト）が迷い込んでくる。
住民たちが奏でる「オンガク」に見とれるチャト。
だが、《霧のまち》の炎の長、風の長、水の長に見つかってしまう。

2

炎の長、風の長、水の長の助けも得て手の言葉を覚えたチャト。
今は《霧のまち》で暮らし、まちについての記録を書き続けている。
中でも「オンガク」と「踊り」の違いが気になっている。

やがて《霧のまち》が、次の場所へ移動を始める時期が来ると、
チャトはもといたまちに戻ることを決め、炎の長、風の長、水の長を誘う。

3

まちの名は《百層》。1億人の人々が暮らす超高層巨大都市。
人々は音声で会話し、「音」の感覚を使った技術や文化にあふれている。
一方で騒音問題も深刻で、まちでは静けさが求められている。

前に比べて、自由に音を発することができなくなった《百層》の様子に戸惑うチャト。
音の規制に反対するデモに巻き込まれたチャトと《霧のまち》の3人は、
レジスタンス（反体制派）のメンバーが集まるクラブに行き着く。

そこで始まった音楽と踊りに触発され、奏で始める風の長。
《百層》の人々もその場で手の言葉を知り、一緒に踊り出す。

4

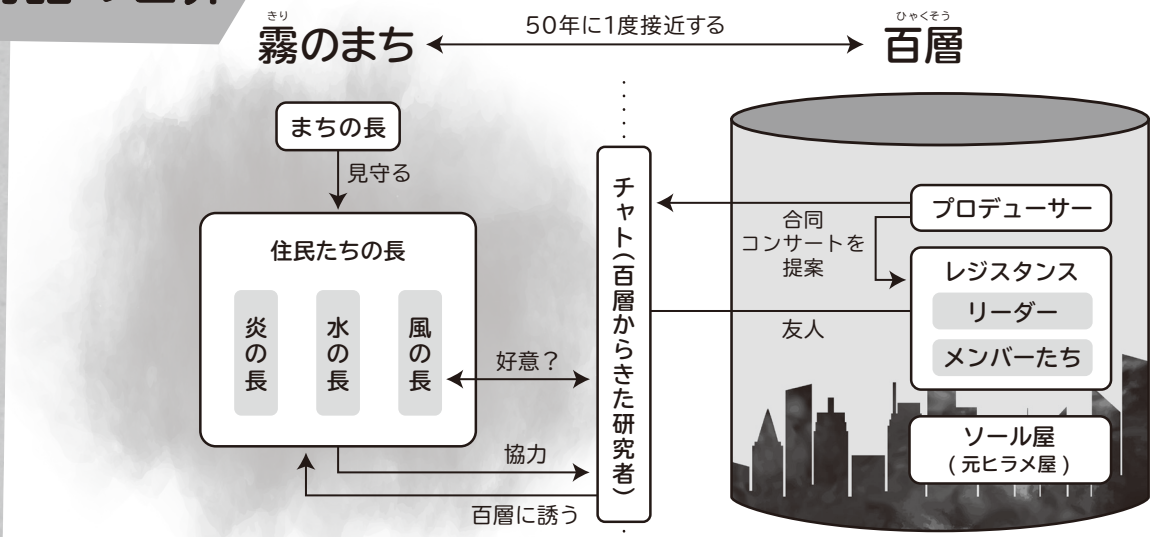
クラブでの様子を見たプロデューサーが提案した、
《霧のまち》と《百層》のメンバーによる合同コンサートの稽古が始まる。
《百層》のやり方で進められる作品づくりに、違和感を覚えるチャトたち。

そんな中、水の長が姿を消す。
まちをさまよっていた彼は、偶然《霧のまち》に関するある事実を知る。

5

水の長がいないまま、コンサートは幕を開ける。
一方、《霧のまち》が《百層》から離れる時が、いよいよ近づいていた――。

物語の世界



土地と暮らし

濃い霧とともに移動するまち。まちなかの家も霧の流れに合わせて動くように作られている。人口約2万人。人々は言い伝えによって、まちがどこへどんなルートで移動するかを知っていて、農産物も、まちの移動経路や時期と滞在場所の気候を計算に入れて生産されている。霧は信仰の対象でもあり、まちの旗には「蕾をかたどった手」「黄金の鳥」と並び「霧」が描かれている。

社会のなりたち

地域やその住民は、「炎」「風」「水」という3つの象徴のもとでグループになっており、それぞれの長のほか、全体を統率する高齢の女性の長がいる。

言葉・通信

手、身体、顔の動きを使う「手語」で会話をするほか、光や振動を使って連絡をとる。多くの人が身につけている「緑の球体」は、光と振動を発する通信装置で、映像の記録や再生もできる。霧の中は「偽太陽」と呼ばれる照明があり、夜間でも連絡はとれるような明るさが保たれている。

文化

身体と手による表現「オンガク」がある。

土地と暮らし

1億人の人が暮らす、100階建ての都市。直径9キロメートルの円形のフロアが100階ぶん積み上がっており、1階ごとに都市が作られている。空は天井の絵で、太陽の代わりに照明が朝・昼・晩を作り出している。1フロアあたりの人口はおよそ100万人。（上層階の富裕層のフロアをのぞき）人口密度はとても高い。

社会のなりたち

階ごとに貧富、身分の差があり、階をまたぐ引っ越しはできない。まちなかでの音量は厳しく規制されていて、住民が出す音はセンサーで見はられている。さらに、場所や時間に合わせた音楽でまちのムードを作ったり、反体制派の住民を鎮圧する音を流すなど、政府は音を通じて人々を従わせている。

言葉・通信

聴覚を使った、話し言葉による会話が基本。歳をとるなど、なんらかの理由で聴こえなくなった場合は機械を使って補う。また、音声を文字に変換する機器も普及している。

文化

まちなかでの会話を耳打ちにできる伸びちぢみする筒「こっそり君」（類似品に「ひっそり君」）のほか、足音を消す靴底も流行中。

東京都
ARTS COUNCIL TOKYO
TOKYO GEIDAI
TOKYO FORWARD 2025 文化プログラム
オールウェルカム TOKYO